自己卑下的呈示における印象

―呈示者による呈示意図の推測に着目して―

14003PAM　中島　英里香

問題と目的

自己呈示とは自己の側面を選択的に相手に呈示することであり，多くの場合，他者評価に影響を与えることを目的として行われる。そして，自己呈示の目的の達成の指標の１つとして，自己呈示を行った際の印象があげられる。日本では文化的規範により，自己卑下的呈示を行うことが好ましいとされている（沼崎・工藤, 2003）。また，自己卑下的呈示には２種類の意図を仮定することができている。１つは自己を低く評価しており，本心でそれを呈示する意図である。もう１つは建前と呼ばれる，自己卑下を行うが実際の自己評価とは異なるような自己呈示である。

自己卑下的呈示について，意図の違いが印象に対してどのような影響を与えるのかを検討した研究はみられない。しかし，推測される呈示意図が異なる場合，すなわち自己呈示を行った際の原因の帰属が異なる場合には，その結果として，呈示者の印象も異なるだろう。

本研究の目的は被呈示者による呈示者の呈示意図の推測が，印象に対してどのような影響を及ぼすのかを検討することである。研究１では，異なる場面における呈示意図の推測と外的要因としての呈示者との関係性の影響を検討する。研究２では，呈示意図の推測と内的要因としての被呈示者の文化的自己観の影響を検討する。

研究１

自己呈示の機能の１つに自己評価の維持・高揚があげられる。自己評価には能力と社会性の次元に分けられるため，研究１では能力場面と性格場面を用いて検討する。

方　法

実験計画　場面（性格と能力）ごとに２（呈示意図；本音 vs 建前）×２（関係性；友人 vs 知人）の参加者間要因で質問紙実験を行った。呈示意図に関しては，褒められた際にそれを否定する状況の記述を変えることによって操作した。

分析対象者　分析対象者は大学生 126 名（男性 24 名，女性 101 名，無記入１名）で，平均年齢は 18.38 歳（SD = 0.56）であった。

質問紙項目　個人的親しみやすさ，社会的望ましさ，活動性の３因子，計 15 項目の形容詞対を使用した。操作チェックとして，褒められた際の呈示者の意図について５件法で尋ねた。

結　果

操作チェック　どちらの場面でも“呈示者は本音で返答をした”という項目が本音群よりも建前群の方が高かったため，呈示意図は適切に操作されていたことが示された（性格：$p < .05$, 能力：$p < .001$）。

印象尺度　各場面での印象の下位尺度について信頼性分析を行った。その結果，どの印象尺度でも α 係数が.60 以上であったため，各因子の平均値を印象得点とした。

性格場面分析　呈示意図と関係性の分散分析では，個人的親しみやすさと活動性において呈示意図の主効果がみられ(それぞれ $p < .01$，$p < .05$)，建前群の方が良い印象を与えていた。社会的望ましさには差がみられなかった。

能力場面分析　能力場面でも性格場面と同様の結果であった。しかし，個人的親しみやすさでは交互作用で有意傾向がみられた（$p < .10$）。

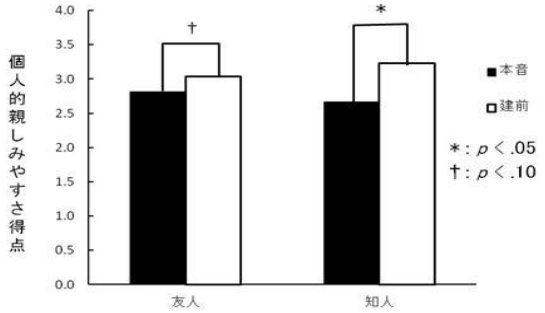

Figure1　能力場面における分散分析結果

どちらの関係性においても，建前群の方が本音群よりも高い値を示していたが知人群の方がその差が大きいという傾向であった(Figure 1)。

考　察

社会的望ましさの側面は，自己卑下的呈示を行うこと自体が望ましいため，意図の影響はみられなかったと考えられる。個人的親しみやすさについては，知人に本音で自己卑下を行うことが関係性から適切ないため，好ましく思われなかった可能性がある。

研究 2

研究 2 では，ある課題を行った際に相手から課題の出来を褒められて自己卑下的呈示を行うというという場面をビデオで作製し，呈示意図と文化的自己観が印象に与える影響を実験室実験で検討し，呈示意図と内的要因の影響を検討した。

方　法

実験の流れ　課題への自信の表明と褒められた際の返答の仕方を組み合わせた 4 種類のビデオを作成し，その内の 1 つを呈示し，質問紙に回答してもらった。内容は能力テストを行った呈示者が調査者に褒められ，それを否定するという内容であった。

質問項目　課題への自信の表明と褒められた際の返答の仕方に対しての本音度を 7 件法で尋ねた。印象項目は研究 1 と同様のものを使用し，個人特性として相互独立的－相互協調的自己観尺度（改訂版）（高田・大本・清家，1995）を使用した。

比較群の構成　課題に対する自信（高・低）と自己呈示方法（笑ってすぐに否定・考えてから真顔で否定）を組み合わせて，その中から呈示意図条件として，自信低群であり考えてから真顔で否定した条件を本音群，自信高群，笑ってすぐに否定した条件を建前群とした。文化的自己観は相互独立的自己観項目を逆転項目処理し，全項目の信頼性分析を行った結果，$\alpha = .77$ であったため，合計得点を文化的自己観得点とした。その平均値（M=91.78，SD＝11.59）よりも分析対象者の得点が高い者を相互協調的自己観群，低い者を相互独立的自己観群とした。

実験計画と分析対象者　2(呈示意図；本音・建前)×2(文化的自己観；相互協調・相互独立)の参加者間要因でビデオ実験を行った。分析対象者は 40 名（男性 3 名，女性 37 名）となり，平均年齢は 19.48 歳（SD＝0.87）であった。各群に 7～13 名が割り当てられた。

結　果

尺度の分析　印象項目の因子分析を行い，その結果に沿って各因子の信頼性分析を行った。α 係数は.58～.89 であり，やや低い値もみられたが，各因子の平均値を印象得点とした。

呈示意図と文化的自己観の影響　分散分析を行った結果，活動性と個人的親しみやすさについては呈示意図の主効果がみられた（それぞれ $p < .05$，$p < .001$）。活動性については研究 1 と同様に建前群の方が活動的であると評価されていたが，個人的親しみやすさについては研究 1 とは異なり，本音群の方が親しみやすいと感じられていた。また，どちらの印象でも文化的自己観の主効果と交互作用はみられなかった。社会的望ましさについては研究 1 と同様にすべての側面において差がみられなかった。

考　察

分析の結果，呈示者の印象に対して文化的自己観の影響がみられなかった。個人内の自己観ではなく,「日本では相互協調的自己観が優勢である」という文化的自己観の共有性が結果に影響を及ぼした可能性が考えられる。

総合考察

2 つの研究において，活動性では建前群の方が本音群よりも高く評価され，社会的望ましさでは差がみられなかった。個人的親しみやすさについては研究 1 と 2 では異なる結果となった。これは研究 1 と 2 の実験方法から生じた呈示者の情報量に差があったためだと考えられる。情報の少ない質問紙実験では文化的規範の影響が出やすく,建前群の方が好まれた可能性がある。

呈示意図と外的･内的要因の影響については，本研究では呈示意図と外的要因としての関係性の影響のみがみられた。しかしながら，呈示意図単独の影響だけでなく，その他の要因も考慮する必要性は示されたといえよう。